

形成など、山地農業の発達の一要素でもあるが、農業の経済的地位が低下した現在、その災害としての面がクローズアップされていると言えよう。錦鯉を育てる養鯉は、これといった産業のない山古志村において、大きな位置を占めており、昭和48年における挙家離村者数が非常に少ないのも、その直前の錦鯉の景気上昇によるものと思われる。同族共同体の性格やかつての行政区分の名残りは、「結束」を意味し、ある程度までは、むしろ人口減少の歯止めとなるが、それを越えると集団的移転につながりやすい。道路状況については、その改善が人口流出を呼ぶ場合もあり、引越し作業が容易になること、村外と接する機会が多くなること、道路整備の際受け取った立ち退き料を移転資金とし得ることなどが考えられよう。しかし、以上のような諸条件は互いに複雑に関わり合っている上、ひとつの地区においていくつもの条件が同時に働くため、実際はこれほど単純ではない。さらに、村全体に亘って過疎化を促しているものとしては、生活用水の不足、マスコミなど村の外側からつくられる、「後進地意識」があげられる。また逆に過疎化の歯止めのひとつとなり得るものとしては、国の重要無形民俗文化財である「牛の角つき（闘牛）」があげられよう。今後の山古志にとって大切な、村の伝統を守り、村に生きていくという自信と責任感につながるように思われるからである。

前橋市の市街地の形成

広 沢 智恵子

1. 目的

現在、人口26万人の前橋市は、戦後大きく発展した群馬県の県庁所在地である。前橋市の発展は、市街地の拡大・発展そのものによく反映され、市街地の発展は、住宅地の発展に代表される。そこで、市街地の形成を住宅地に焦点をあてて考察を行うことにした。考察の中心は、住宅地の形成に働く要因を解明することである。

2. 枠組

まず、第1章で自然環境・人文環境の面から前橋市を概観し、第2章では、古代から現代まで歴史的に考察した。地域により、住宅地形成の要因が異なると思われたので、客観的方法で（主成分分析）地域区分した。これが第3章である。第4章では、主成分分析の結果得られた3地域より、代表となる町を選び、アンケート調査を行い、興味ある1地区についてフィールド調査を行った。これらの結果をまとめ、考察を行ったのが第5章である。

3. 結果

考察の結果、住宅地形成には必ず何らかの要因があり、私が調査し考察した範囲では「地の利」「政策」「計画」の3要因があることがわかった。

「地の利」が要因になっているのは、前橋市中心部の桃井地区である。かつては、都市的恩恵を求め永住するための住宅地が形成されたが、核家族化が進み新市域へ独立して流出し、ドーナツ化現象をひき起こしているが、現在では社宅・公務員用住宅地として以前とは異なった目的を持つ人々により、住宅地が形成され維持されている。

「政策」は、市が行っている都市計画、業務団地の造成などによる間接的な要因である。これに該当するのは、元総社地区で、この地区でフィールド調査を行った。昭和35年を境に、戦前の農村集落を核にして、急速に住宅地化が進められた。それを推進したのは2種類の住宅と2つの階層である。

- 住宅 { ① 一般住宅
② 集合住宅（長屋形式または同じパターンの住宅の2軒以上の集まり）
- 階層 { ① 多くは一戸建住宅に住むホワイトカラー的住民
② 多くは集合住宅に住み、工業団地に勤務するブルーカラー的住民

また、新しい住民ほど現状に不満が多い。それは、道路の整備・舗装や下水道、買物の不便さへの不満であり、表面上は住宅が増えて急激に都市化したようだが、内面的に追いついていない。従って都市化ではなく、住宅地化である。

「計画」という要因は、市や住宅供給公社が行った住宅団地造成による直接的な要因である。これが要因となっているのは、大利根地区である。従って住宅地は、ある時期に集中して形成されている。大利根地区の団地は、同規模の宅地分譲を行い、一戸建の住宅のみが建てられている。従って住民には、階層的なまとまりがみられる。しかし、中心部から離れ、車しか交通手段のない面に問題が残る。また、機能的にみても、商工業機能に欠けている。大利根地区も元総社地区と同様に、都市化ではなく、住宅地化であった。

前橋市の中で、3つの地区しか調査できなかったが、これだけでも地域差があらわれていることがわかった。

福山市の工業化と地域の変貌

桑田裕代

福山市は、昭和36年に日本鋼管福山製鉄所を誘致してから急速に都市化が進んでいった。昭和30年に206,601人（現市域に組替済み）だった人口が、昭和53年には340,679人に増加した。この増加は、転入による生産年齢層の増加とその結果ベビーブームをよんで年少人口が増加したことによるものであった。こうして、製鉄所の誘致は福山市の産業構成に大きな変化を与え、昭和35年から昭和40年代にかけて工業化が著しく進展し、昭和50年代に入ると商業の発展が目立った。そこで、福山市は大企業の進出によっていかに工業化され、それは地元工業にどんな影響を与えたか。また、住宅団地の建設や道路整備はどのようにして行なわれ、都市化を進展させていったか。最後に商業にどんな変貌をもたらしているかを取りあげて、福山市の発展を考察することにした。

福山市の工業化は、製造出荷額では鉄鋼業による異常な伸びで、昭和52年には昭和35年の約25倍の年間8,852億円となった。しかし、依然繊維関係や木工関係を中心とした多くの零細中小企業と比較的大規模な機械工業や多額の製造品出荷額をあげる鉄鋼業などごく少数の工場が混在している状態にある。日本鋼管福山製鉄所の雇用は、京浜からの配転者や半数以上の中国地方以外出身者で占められ、地元福山市からの雇用は12年間にわずか450人にすぎなかった。また、関連企業や下請企業で